



金融財政

2007年(平成19年) 12月17日 (月) 第9883号 (購読料金 月額税込み5,565円)

師走の風景

お茶の水女子大学教授 篠塚英子



師走の初旬。日本経済研究センター・日本経済新聞社・テレビ東京主催の「エコノミスト懇親会」

に久しぶりに顔を出した。

政界、産業界そしてエコノミスト総計600人強で大盛況。参加者の顔ぶれも若返ったように思う。これは自分が年を取った証拠でもある。こうした宴会では一人の識者を独占してはならない。相手の目線に誰かを物色している影を見たら、サッと場を去るのが大事なマナーである。今回は、最初から狙いを定めて参加した。一つは、今年度末で大学を辞めるので、自分の経済学担当の後任に有能な非常勤講師を探し出すこと。もう一つは、現在進行中の独立行政法人改革の状況や情報通から聞き出すことである。前者は絞っていた論客に会えて、快諾を得られた。快挙。

もう一方の、もった政治マターになっている独立行政法人改革の件は、内外の労働経済学や労働法の研究者にとつて最大の懸念事項である。統合見直し案の対象に、厚生労働省管轄の「労働政策研

究・研修機構(JILPT)」が入っているからである。労働組合組織率が18%台まで低下した現在、政策決定の場から労働者の視点が排除されつつあると思われる。何よりも新自由主義が席卷するご時勢。企業の声だけが政策に反映するのでは、政府にとつても不都合であろう。

JILPTは、中立的な政策立案に貴重な調査統計資料を提供しており、海外から高い評価を得ていた。だから廃止・見直し案のニュースが入った11月、内外の研究者から一斉に反対署名が集まり、2週間で700人弱に上った。財政赤字が厳しい中、天下りの巢窟(めくら)になって問題法人も多い。だがこれらと十把一か

らげにしないで、という悲鳴である。ところが何と、宴会場の目の前で、マイクを握っている大声は、渡辺喜美行政改革担当相であった。今、各省説得行脚からたどり着いたというスピーチの最中である。もちろん、壇上から降りた大臣に、猪突猛進、研究者署名のアピールをした。手応えは五分五分。日銀政策委員時代に一度だけ、の面識にすぎない。しかし、こうした偶然の機会があるのが、宴会の魅力でもある。

CONTENTS

●解説 改善から調整局面へ 成長とリスク管理の両立も課題に(根本直子) —大手銀行6グループの中間決算…………… 2	●海外誌紙に見る日本の評判……………10
●BANCO 世界の過剰流動性(金子太郎) …… 3	●コラム・コラム (藤原作弥) ……………11
●照一隅 「未分裂」の効用(峯瑠波) …… 5	●国際経済 高まる再編機運、世界最大手にも合併観測 —ワインに追い詰められる欧米ビール業界 12
●News Eye 資産運用で明暗—新規参入5行の中間決算 …… 8	●内閣府月例経済報告〈11月〉……………14
●マーケットレーダー 戦略的ポジション(小池正一郎) …………… 9	●書評 原文人著 『21世紀の国富論』(山下英次) ……………15
	●連載小説⑭ 炎の森 (砂原和雄) ……………16